

テーマ 『追究し発信する力を育成する社会科』

1 テーマ設定の理由

国際化社会、少子高齢化社会、情報化社会など刻々と変化する現代社会はさまざまなことばで表現されている。この「変化の激しい社会」「先行き不透明な社会」現代社会の中で、学校教育とりわけ中等教育には、学び続ける力（生涯学習力や自己学習力）の育成が求められている。

社会科は本来、一人一人の社会生活に根ざした実践的な教科であり、そこでの学習成果は社会生活の中で活用され、磨かれ育っていくことが期待される教科である。また、これを具現化し実践していくことが「生きる力」を育てる社会科であり、冒頭に述べたような時代であるからこそ学び続ける力の育成が期待され望まれる教科である。

これからの時代に文部科学省の掲げる「生きる力」とは「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」の3つからなり、そのうち「知」の側面からとらえたものが「確かな学力」ということになる。

また「確かな学力」とはどのようなものかについては、『知識や技能に加えて、自分で課題を発見し、主体的に判断し行動し、よりよく課題を解決する資質や能力を含むもの』としている。ここに授業を展開していく上でのキーワードが示されている。それは「知識や技能」「学び方」「学ぶ意欲」「問題発見能力」「思考力」「判断力」「問題解決能力」「表現力」である。

2 本年度の研究について

本校では昨年度までの3年間にわたって『「学びを拓く」生徒の育成』を研究主題に、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容の定着に取り組んできた。社会科では教科の特性を生かして「確かな学力の定着を図る社会科授業のあり方」をテーマに、問題解決的な学習を取り入れ、調査活動や資料活用、情報の収集や選択・分析を行い、その結果をわかりやすい方法で表現することによって他に伝える力の育成を狙ったものであった。

本年度より本校の研究主題を『豊かな学びで個を育む』として、これをめざす生徒像と照らし合わせて、(ア)個性を拓く学び(イ)社会につなぐ学び(ウ)世界と結ぶ学びの3つの視点で捉え、それぞれにつけたい力を設定した。そして私たちは「学び」とは「問い」を解決していく状態のこととし、この状態は「習得」と「探究」の2つのサイクルと考えた。

① 基礎的・基本的な知識や技能を確実に定着させる学び（習得サイクル）

② 知識や技能を活用し、課題を追究し発信する学び（探究サイクル）

〔詳細は総論参照〕

【仮説】

「追究する」ことによって、生徒たちは知的好奇心を高め、思考力や判断力を養い、知識欲を持ち「発信する」によって、生徒たちは他者との共感（信頼性や共同性）を得る。

人は誰も、現在及び将来にわたってよりよく生きたいと願っている。人が現在、また将来、問題に直面したときや疑問を感じたとき、自らの力で解決に取り組まなくてはならない。この事こそが「生きる力」を発揮する場面の到来である。また「人は社会的動物」と言われる。他からの働きかけによって人間形成

がなされ、人として向上し、そして他に対して働きかけることによっても人間形成がされる。

本校社会科では人間を社会的な存在としてとらえ、他とのコミュニケーションする能力も学習活動において育成すべき大きな能力の一つであろうと考えている。つまり、学習過程において他との関わりを持ち、その関わりの中で知識や情報、技能を習得し、また自らが知識や情報を交換（発信）することで、来るべき問題解決の場面において個々がより適切に問題解決にあたることができるようになるであろうし、そしてこのことが民主的な社会を構築する人間（公民）の育成につながると考えている。

また、本校社会科では、平成9年度から3年間にわたって『問題解決能力の育成』を主題に掲げ授業研究実践を行ってきた。そこでは学習過程を「気づく」「深める」「問い直す」の段階に分け、それぞれの段階で問題発見の能力、社会的事象に対して思考したり判断したりする力、問題解決能力、自分なりの考え表現する力、新たな問題解決に必要な知識や技能を習得する力の育成を柱に学習を構成してきた。

社会科ではこの問題解決型の学習を引き継ぎ、その過程の中に「習得サイクル」と「探究サイクル」を設けることによって研究主題に迫ろうと考えている。

そこで、例えば、公民的分野での単元『現代社会と私たちの生活』では、戦後の高度経済成長の過程と国民生活の変化や国際化の進展を理解し、著しく変化する現代社会の中で自らが将来の職業や情報化社会の中でどのように社会と関わっていくかを考えさせるという学習過程の中に「気づく」「深める」「問い直す」の学習場面を設けながら、① 習得サイクル ② 探究サイクルに着目した授業を試みることから始まった。

3 成果と課題

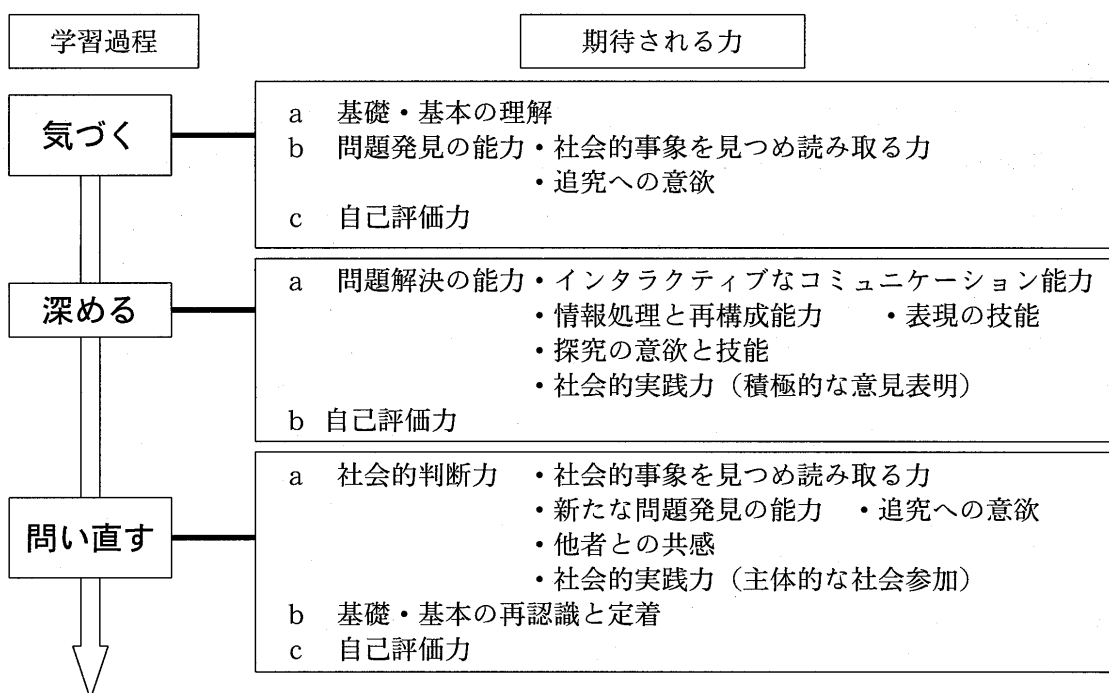
「問い直し」という場面を設け、新たな課題や問題提起をするスタイルの授業の中で、生徒たちはその課題や問題に対して解決（追究）する技能は一定の成果を見ることができる。具体的には、資料の収集、資料の取捨選択と再構成、資料をまとめ発表する技能がこれに当たるものである。これらは社会科が取り組んできた問題解決型の学習の成果であろうと思われる。昨年までの社会科ではこの「問い直し」によって基礎・基本の定着を図ることをテーマに掲げ研究に取り組んできたものであった。

本年度からは、社会科では問題解決型の学習を踏襲する中に「発信」というテーマを設けた。このねらいは、問題解決型学習での「問い直し」にあたる問題を解決という活動が発信＝報告という終末ではなく、発信＝提案に高めたいと考えたものである。

本年度の実践の中では、公民的分野（必修）、選択社会科の中に、この発信＝提案の試みを見ることができる。次年度は以下を「発信」を支える二つの技能・能力と考え、これらの向上に努めたいと考えている。

- (1) コミュニケーション技能の向上～他者の理解
- (2) 問題発見能力の向上＝社会を観る目の育成

構想図



豊かな学び

(1) 個性を拓く学び

他と関わることによって、自分の考えや表見を作り上げ、学びの資質と能力を培う。
 社会的事象の中に「？＝疑問」を持つことから始まり、さまざまな資料を収集・取捨選択し、再構成しながら問題解決に迫ることによって社会の一面が見えてくる。
 そして、わかったこと（新たな知識）と問題解決の過程や自分の考えを自分らしい方法で他者に伝え、また他者の知識や意見を吸収することによって、学び方やコミュニケーション能力（技能）が高められていくこと。

(2) 社会につなぐ学び

他と関わることによって、集団や社会の一員としての資質と能力を培う

(3) 世界と結ぶ学び

他と関わることによって、「共に生きる」ための基礎的な資質を培う

実践1 必修教科1年生

① 題材 中世の日本

② 題材について

本題材は、本格的な歴史学習が始まり中世の日本の段階に位置づけられる部分であり、引き続き歴史学習に対する興味・関心を高める部分であると思われる。今回、本校の研究主題である「個性を拓く学び」生徒の育成に近づき、基礎・基本の定着を図るうえで、教科書を中心にしっかりと読ませることを意識した。教科書の記述をていねいに解読することは、単なる暗記ではない発展性や可能性を含めた学習につながると考える。それだけに暗記科目という認識から脱し、考える過程をとおして「なるほど、分かった」と実感できる内容こそが、「個性を拓く学び」にかかわり生徒の学習意欲を高めるのではなかろうか。

授業にあたっては教科書の記述の中で因果関係をさぐり、その結果、何がどう変わったのかを生徒に問いかけていく。つまり生徒が考える過程をどのようにたどっていくのかが大切なポイントである。

今回の単元は、二つの節から構成されている。日本における中世といわれる時代で、大きく、鎌倉時代、室町時代に分けられる。第1節では、武士勢力が、貴族勢力に取って代わる背景から、東国を中心に本格的な武士政権を樹立し、展開させていった過程を理解することをねらいとしている。この政権が、荘園・公領といういわば古代の国家機構を受け継いで成り立っていることに視点をあてつつ、一方では、古代国家機構とは異なった、領地を媒介とした主従関係を通して成り立っている社会、前期封建社会であることに視点をあてたい。武士の生活基盤とされている惣領制も、このような関係の上に展開されている。第2節では、モンゴルの来襲から、室町幕府の成立・展開、南北朝の動乱、応仁の乱、戦国時代をおもに取り上げている。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標 評価規準	武家政権の出現により成立した鎌倉時代の特徴について理解する。 武士が台頭したことにより生じる影響について考えを深め、武家社会が成立し、やがて全国が武家政権に統一されてゆく過程を理解する。
関心・意欲・態度	課題に対して積極的に取り組み、自分の考えを導き出すことができる。また、他者の意見との違いについて考察することができる。
思考・判断	武家政権の成立が社会にどのような変化をもたらしたのかを考察できる。武士の成長により、やがて武士の政権が成立するという過程を説明できる。
技能・表現	資料をもとに武家政権がどのように発達したかを段階的に整理することができる。
知識・理解	貴族の政権と武家の政権の違いについて理解する。 武家政権の発達とその影響について理解する。

④ 学習計画 全4時間（単元構成表）

学習過程	学習の中心	教師の働きかけと学びのサイクルについて	観 点
武士の成長	武士の登場 武士の成長と院政 荘園と武士	身近な地域に存在した武士団などを積極的に調べ、地名と武士の関係などに関心を高める。	関心・意欲 態度

武家政権の成立 (本 時)	源平の争乱 鎌倉幕府の始まり 執権政治	武士の生活や生き方を学び、朝廷と幕府の 勢力関係、将軍と御家人の関係を考察して みる。	思考・判断
武士と民衆の動き	武士と地頭 武士の生活 民衆の動き	鎌倉時代の農業技術や手工業・商業の発達 とそれにとまなう生活の向上について理解 し、その知識を身につける。	知識・理解
鎌倉時代の宗教と 文化	新しい仏教の教え 文化の新しい動き	鎌倉仏教が中世を通して多くの人々の心を とらえて広まった理由を、教えの特色や社 会の動きと関連させて説明できる。	技能・表現

⑤ 本時の目標

- (1) 武家政権が東国に生まれ、支配力を広げていった様子を、幕府と朝廷の関係などから理解する。
- (2) 将軍や執権と御家人の関係に注目して、武家政権の特色を理解する。

⑥ 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援	備 考
なぜ頼朝は平家をたおそうとしたのだ ろうか考える。	当時、平家はどう思われていたかを考 えさせる。	歴史パネル
なぜ、鎌倉に幕府が開かれたのか考え る。	鎌倉の地理的要因を観察させる。	教科書資料
幕府支配の工夫はどんなところだった か。	教科書を読み、新たな制度を発表させ る。	授業プリント
頼朝死後、なぜ北条氏が実権を握った のか。	北条政子が新政権確立に大きく影響し ていることに気づかせる。	教科書資料
承久の乱によって、幕府の力はどのよ うに変化したのか考える。	承久の乱の勝利により、幕府が全国に 勢力を広げることができたことを確認 させる。	授業プリント

⑦ 結果と考察

中世は、武士が台頭して鎌倉幕府が成立し、その後、南北朝の争乱の中で室町幕府が成立するという動きの中で、しだいに公家勢力を圧倒しながら武家社会が大きな力を持つていくことを学ばせた。さらに、社会的な変動の中で、地方の武士の力が強くなるだけでなく、庶民の力も大きく成長し、一揆などを結び、自治的な仕組みも生まれていくことを扱った。また、その間、東アジア世界とのかかわりが深かったことに気づかせるようにした。すなわち、元寇のような事件がありながら、すぐに交易が拡大しそれが日明貿易に展開したりするようなことに気づかせるようにした。なお、これらの取り扱いの中で、例えば、幕府の仕組みを細かく学習させて、鎌倉幕府と室町幕府を比較してその違いを捉えさせるなどということではなく、武家政権の特色として大きく歴史の流れを捉えさせることに重点を置いた。

また、鎌倉時代以来の農業や手工業の発達、それにとまなう商品流通の展開など、諸産業が発達したことを中世全体のものとして扱った。そうした産業の発達が、人々の生活の向上をもたらし、畿内を中心に

都市や農村での自治的な仕組みが生まれ、人々の生活や社会に大きな変化を与えた影響について理解させた。一方、文化についても、武士や庶民の力が伸びるという状況を背景に、新しい文化が生み出され、特色あるものがあつたことを考えさせるようにした。それらの取り扱いの中で、実際の授業では代表的な事例を取り上げてその特色を考えさせるようにし、網羅的な取り扱いにならないようにした。

生徒の興味・関心を高めたり、作業的・体験的な学習をおこなうために、この時代の教材などの取り扱いについては、身近な地域の歴史教材を扱うことが重要であると考えた。さいわい、多くの教科書にも使われている、郷土・和歌山の「阿氏河荘」のカナ書きの訴状を鎌倉時代この時期の重要な資料として積極的に活用した。振り返ってみると、この時代の資料として、生徒に視覚的に捉えられるものとして教科書記載の絵巻物などの場面が多くあるのでそれを活用した。大きなパネルや拡大カラーコピーも生徒の関心を引きやすいので授業に際して準備した。なお、文字資料については言うまでもなく古語文であるので、生徒に持たせてある学習資料集の現代文訳を利用した。

さて、本教材を考察してみると、3つの特色に分けられる。1つ目は当時の政治的駆け引きに意識を向けさせたことである。「朝廷の政治を思うままに動かしたため」「頼朝は義経を捕らえることを口実に朝廷に強くせまり」「国ごとに守護を、荘園や公領ごとに地頭を」などの内容は教科書でしばしば併記されているが、生徒は個々の事象を独立したできごとと認識しやすい。教科書を深く読み込むことで、もう一歩踏み込んだ因果関係や背景といった歴史の大きな流れに触れることができる。このことは多角的な視点で歴史を捉える土壌を育むことにつながる。2つ目は課題解決的に学習の展開ができたことである。資料をもとに課題解決的に学習が展開できること。また、この過程を通じて頼朝の支配は平家滅亡とともに確立されたのではなく、段階を経て成立し、当初は東日本を中心とするものにすぎなかったという、確たる認識の形成を成立させた。3つ目は資料活用能力の育成であった。中学校では資料を時間をかけて1つ1つ読みこなす機会が少ない。今回は、阿氏河荘のカナ書きの資料を詳しく読み下したが、平生なかなか時間を割いて授業することは多くない、それだけになるべく多くの資料に触れそれを読みこなす力を身につけておく必要がある。

本教材からの発展的学習として、この後出現する武家政権を鎌倉幕府の成立背景を土台として比較し、それぞれの幕府の相違点について生徒自らが、考察し理解を深化することができるよう指導したい。そして、覚えることにとらわれがちな歴史学習において、どこを基点として勢力範囲がどこまで及ぶのか、どのように拡大していくのかなど、地理的な視点を盛り込むことにより歴史学習を多面的な視野に立って考察できる生徒に育てていきたい。また、文献資料や史料に親しみ、そこから必要な情報を読み取る力を育てたい。このことは知識の応用、すなわち歴史的背景を通して因果関係を推察し、生徒独自の歴史観を育てていくよう今後指導していきたい。

実践2 必修教科3年生

① 題材 「企業」(きぎょう)

② 題材について

少子・高齢化や情報化社会、国際化社会などのことばで表現される現代社会の変化は激しい。この社会変化の激しさは私たちを取り巻く経済活動においても同様である。また将来の不透明さも経済活動において同様であろう。永く、私たちの生活を支えてきた年金制度や医療制度など社会保障の削減、終身雇用や年功序列といった雇用慣行の変化により、国民一人一人の自助努力や自己責任が一層求められる時代になった。また、規制緩和が拡大される中、さまざまな金融商品やサービスが登場で、私たちはこれら多くの商品の中から選択できるという利便性を獲得した反面、商品のもつリスクも多様化・複雑化し、その性格やしくみを理解することが不可欠になった。また、銀行や郵便局という金融機関に国民からの預貯金という形でお金を集め、それを重厚長大といわれた基幹産業に融資（いわゆる間接投資）した。郵便局は当然のこと金融機関は政府の手厚い保護のもとで、国民は安心してお金を預けることができ、その上に私たちは自分の将来設計を描くことができた。日本が経済の高度成長を謳歌した時代であった。「消費は美德」という言葉が誕生したのもこの時代であった。

バブルの崩壊はこの様相を一変した。ここで国民は「絶対安全」と信じていた銀行にも破綻があるということを経験し、その信用（神話とも言われる）が崩れたとき、預貯金者は考えもしなかったリスクの存在を知ったのである。こうした金融機関の信用崩壊は「筆筒預金」と「自己責任での直接投資」を生み出した。後者は国民自らが労働で得た対価を、自らの生活を見通したライフスタイルに見合ったリスクとリターンの金融商品を購入し、将来に備える「貯蓄から投資」の時代が変わってきたことを表しているのではないだろうか。

こうした経済活動に関わる社会に変化と自己責任が叫ばれる中で、自らの生活を守り、豊かに暮らしていくためには、学校教育とりわけ社会科公民的分野で経済・金融に関する基礎的な知識を習得しておくことの必要性が高まっていると言えるのではないだろうか。これは他の領域・教科ではなく社会科公民的分野でなくてはできない（できにくい）学習だと考えている。しかしながら教科書の記述は、このような観点から考えると十分な記述がされているとは言えないと感じるのは私だけであろうか。

本単元では学習指導要領（社会科）公民的分野 2 内容の(2)のア 私たちの生活と経済に関わる単元であり、「株式会社（企業）」を素材として資金の調達や運用、消費者としての判断を、『みんなで体験！株式会社とお金のしくみ（制作・発行：証券知識普及プロジェクト）』を教材に、調査や作業活動、シミュレーションといった課題学習を行う中で、生徒一人一人に経済への興味・関心を高めさせ、資本主義経済のおおまかなしくみと意義を、具体的、体験的・発展的に学習させたいと考えた。

また金融システムを理解することは、生徒たちの両親は働いてなぜ稼ぐことができるのか、そこで得た財を自分たちはどのように消費しているのかを学ぶことで、社会の中の自分の立場を知ることになるのではないかと考える。

③ 学習目標と評価基準

基礎・基本	学習の目標	「株式会社の経営」の模擬的な体験を通じて ・資本主義経済のしくみについて理解する。 ・国民経済、金融システムについて理解する。 ・会社組織とその活動について体験的に理解する。 ・資本主義社会における「自己責任」について体験的に理解する。
興味・関心	・個人や企業の経済活動への関心を高め、これらの活動について意欲的に探究しようとする ・投資について関心を持ち、「リスク」と「リターン」について考えようとする	
思考・判断	・社会における企業の役割と個人や企業の経済活動のあり方について、さまざまな立場に立って適切に考えることができる。	
資料活用・表現	・個人や企業の経済活動について、資料や学習での発表などを通じての情報を得ることができる。 ・「株式会社の経営」模擬的な体験を通じて、情報の発信ができる。	
知識・理解	・資本主義社会の基本的なしくみ、経済活動の意義、消費者や投資家、企業や金融の働きについて理解できる。	

④ 学習計画（全10時間）

時 間	学 習 の 中 心	教師の働きかけと学びのサイクルについて	観 点
第1時	「株式会社とお金のしくみガイド ス編」 新しい事業をはじめよう グループ活動（会社経営）	・本時以降の学習活動について ・会社組織とは何かを理解する《習得》 ・起業しよう《探究》	興味・関心
第2時	事業計画を立て、発表する グループ活動（会社経営）	・事業計画について討論と発表 Part1《探究》	思考・判断 表現（発信）
第3・4時	企業へ投資する 個人活動（投資家） グループ活動（会社経営）	・事業計画の発表 Part2 と相互評価 ・投資（資金運用）をしよう《習得》	資料活用 表現（発信） 思考・判断 知識・理解
第5時	商品開発をする グループ活動（会社経営）	・広告や宣伝の重要性について気づかせる 《探究》	興味・関心
第6時	商品の販売をする グループ活動（会社経営） 個人活動（消費者）	・商品の販売を通じて市場経済を理解する 《習得》	知識・理解 資料活用 表現（発信）
第7・8時	企業の決算をする グループ活動（会社経営）	・企業活動についてまとめる《探究》	知識・理解 思考・判断
第9時	株主総会を開く グループ活動（会社経営） 個人活動（投資家）	・株主総会を開こう（発表 Part3） ・株主と株式会社の関係について理解する 《習得》	表現（発信） 知識・理解
第10時	投資成績をまとめる 個人活動（投資家） 学習を振り返る	・投資の社会的役割について理解する《探究》 ・「リスク」と「リターン」について考える 《習得》	思考・判断 知識・理解

参考文献：金融教育ガイドブック ―学校における実践事例集― 金融広報中央委員会 2005年
図説 世の中こうなっている「株式会社のしくみ」 PHP 研究所 1993年

⑤ 本時の目標

- (1) 株主総会の意義と重要性を理解する。
- (2) 株主と株式会社の関係を理解する。

⑥ 本時の展開（9/10）

学 習 活 動	教 師 の 支 援	備 考
株主総会の意義 株主総会を開く 株主の役割 会社の役割 次時の予告	<ul style="list-style-type: none"> ・株主総会とは何か 株主が参加できる最高意志決定の場であることを理解させる。 ・株主総会を開く目的について考えさせる 各会社ごとの発表 各担当の役割について考えさせる ・投資家の立場から ・企業経営の立場から ・消費者に対して ・投資家に対して ・社会に対して ・投資成績の計算 投資家の役割と責任 ・活動のまとめ 	プレゼンテーション シート

⑦ 結果と考察

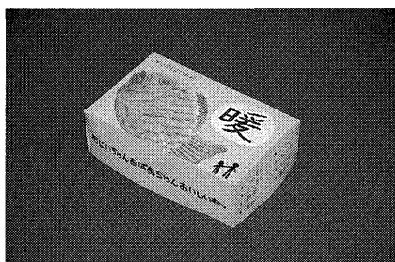
ア ワークシートの使用

今回の単元は、前編を『私たちの暮らしと経済』と題した授業者作成のワークシートを使っの授業に続く部分で株式会社のしくみをクローズアップさせたもので、使用したワークシートは授業者作成のものではなく、証券知識普及プロジェクトより提供を受けたものである。生徒たちには学習の過程が理解しやすく、授業で準備もスムーズであった。このワークシートにはこのプロジェクトの意図（ねらい）があり、あわせて授業者の意図を組み入れて授業を進めることに多少の苦慮があった。

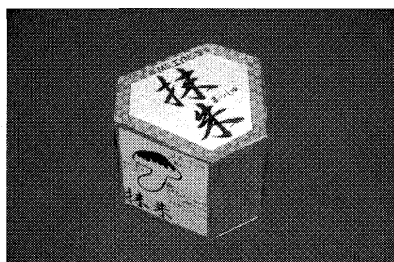
学習活動に対する生徒たちの関心は高く、特に商品開発（パッケージの制作・下写真参照）については極めて意欲的であり、各社（各班）で消費者（ターゲット）に合わせたものが開発された。この場面では生徒たちが、社会の動向や時代の変化を考えながら互いの考えを言い合い、聞き、時には放課後まで話し合いをしていた。この商品開発に掛ける生徒たちの意気込みには感心させられ、「実際のお菓子会社の商品開発もこんな様子なのかな」を感じさせるものであった。

まさに、本年度からの研究テーマである「追究と発信」の場面を見たように思う。また、常日頃、私が目指している「考える社会科」「創造的学習活動」の1つの授業スタイルを見たように思う。

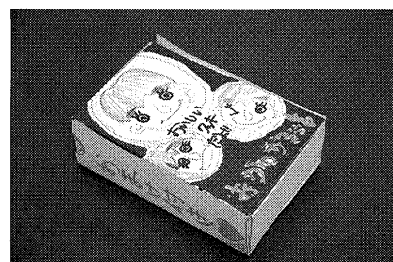
投資とその決算の場面では、計算に多くの時間を費やすこととなった。「株価がなぜ変動するか？」は今回のワークシートでは学習されていないため、その変動結果のみから投資決算を行った。その計算が少々手数のかかる状態（複雑な計算ではない）だったため、多くのリターンを得ることができた授業後の感想にも『株式投資は複雑。・・・（中略）・・・将来、私は株式投資をしないと思う』と、記している生徒が複数存在することも事実である。



「暖」生徒作品



「抹朱」生徒作品



「おかのかお」生徒作品

イ 研究テーマ

社会科では課題解決型の学習をする中で、『問い直し』の場面を設けた学習に取り組んでいる。授業を進める中で、生徒たちに新たな課題を提示することで基礎・基本の定着や、発展的な課題を設けて追究させることをねらいとしている。

今回の単元では研究テーマに関わった『問い直し』と位置づけ、第5時で「ところでね、どんな菓子を作ったら、どんな人が買ってくれるか？」と問いかけてみた。この『問い直し』は発展的な学習を（追究）ねらったものであったが、生徒たちは商品（パッケージ）開発のために、現代社会の特色や将来の日本を予測するなど、意欲的に取り組んでいた。体験的（模擬体験的）な学習形態の重要性を感じた部分でもある。今後もこのような体験的（模擬体験的）な学習を取り入れたいと考えている。

また、2つ目の『問い直し』と位置づけた「ところで、君たちはなぜ投資をするか？」これは習得の再確認である。投資を投資家の立場だけでなく、企業の立場など多面的に考えさせるには至らなかったように感じる。次回への課題である。

以下、授業後の生徒作文

『まず、ビデオを観て「おもしろそう」と思った。1回目のプレゼンテーションはあまり深く考えたものではなく、「それなり投資してくれればいいか」と簡単に考えていた。次のパッケージを作る時間はおもしろかった。でも、その途中で「売れる商品でどんなの？」という先生のことばで私たちの班の商品開発が変わった。「どんな人に食べてもらう？」これが私たちの班のみんなを苦しめた。とうとう販売の時間になった。このプレゼンテーションが大変だった。先生がいつも言っている「プレゼンテーションとは報告じゃない。提案なんだぞ」がわかった。みんなに提案することの大変さを感じ、緊張した1時間だった』

『結局、私たちの班の株価は12,280円と上がっていたので安心した。でも、この授業で会社を経営することの難しさを感じた。私の父も小さな会社を経営しているけど、夜遅くまで机に向かっている姿を何度か見たことがある。この授業で父の仕事の大変さを感じた。でも社長っていいかも・・・』

実践3 選択教科2・3年生

① 題材 中学生のための世の中入門 — 商業について考えよう —

② 題材について

本講座は、2年生14名と3年生5名の19名が受講している。また、内容は、3年生の経済学習と密接に関係するコンビニエンスストア（以後、コンビニと略）とスーパーマーケットを教材として取り上げ講座の授業を構成している。授業時数は全9時間、今までの4時間では、商業の形態や歴史、食品スーパーとコンビニの相違点、食品スーパーやコンビニの商品配置の学習を行ってきた。

ところで、選択授業の学習では必修教科の学習とは違った様々な制約もある一方で、必修教科にはない優位面もある。例えば、必修教科では扱うことのできない学習について、興味を持った生徒と授業をおこなうことができるということである。本学習も3年生の経済学習の「導入にあたる部分」や「商品の流通」など1単位時間で行う学習を発展させ、商業という視点で9時間の授業として構成した。コンビニやスーパーマーケットのような小売販売店を学習することは、社会科に興味や関心のない生徒にとっても身近な生活の中から社会を見ることで意欲的に学習することができるものと考えている。また、このような学習を通して、自分たちの生活の場が経済活動の一場面であり、それが社会全体の動きと密接に関係していると感じ取ったり、コンビニや食品スーパーの商品の配置や店舗の立地などつい見過ごされがちなことから教材として扱うことで、経営者や消費者の視点から経済の仕組みの一部分に触れたりさせたいと考えている。

本時の学習は大きく次の3つの部分から構成されている。

- ① 3年教科書（東京書籍）のハンバーガーショップの立地の地図を利用し、消費者・経営者の視点でコンビニの立地場所を考える。
- ② 自分の考えをもとにさらに発展させ、グループでの立地場所を決定する。その際、個々の立地場所についてプラス面・マイナス面を検討し、その根拠となることを明確にする。
- ③ コンビニの営業担当の方から立地や商品配置について、専門家の話を聞く。

この学習は3年生の経済学習という視点で考えれば、学習の発展であり「追求サイクル」と考えることができる。しかし、ごく身近な社会（世の中の仕組み）について、生徒が触れてみたり、考えてみたりする過程を経験することは、基礎的・基本的な内容を生徒が本当に実感する、言い換えれば知識や技能として「習得サイクル」でもあると考えている。

本講座の生徒は先にも述べているが、2・3年生の19名から構成されており、普段はそれぞれの学級で学習を行っている。本時の学習グループも3年生5人をリーダーとした任意のグループであり、この学習の時間以外、学校生活の中でほとんど交流することのない生徒もいる。第4時の「コンビニの商品配置を考えよう」の中で、グループ学習を行ってはいるものの3年生を中心としてグループ学習がうまく機能するのかどうか不安な面もある。しかし一方で、自分の考えを2・3年生という異学年集団の中で交流することは生徒たちにとって普段は経験のできないものを得る機会ともなることを期待している。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標	コンビニやスーパーマーケットの仕組みについて意欲的に追求し、自分の生活と経済活動の関わりについて考察することができる。また、コンビニやスーパーマーケットの商品配置や立地について検討することで、自分の考えをまとめたり、発表したりするとともに自分の生活に身近な経済活動の仕組みや意義について理解する。
評価規準	
関心・意欲・態度	身近な消費生活や経済活動に関心を持ち、経営者としての視点でコンビニやスーパーマーケットの立地や販売などの経済活動に関する諸問題を意欲的に追求できる。

思考・判断	身近な事例（コンビニやスーパーマーケット）を学習することで消費生活や経済活動を客観的にとらえなおし、経済活動についての見方や考え方ができるようになったり、経済活動が身近な社会生活の様々な場面と密接に関連していることを考察したり、消費者としての適切な関わり方を判断したりできる。
技能・表現	コンビニやスーパーマーケットについて、適切な資料をもとに、追及した結果をまとめたり、発表したりすることができる。
知識・理解	身近な事例（コンビニやスーパーマーケット）について、しくみや意義を理解することができる。また、コンビニやスーパーマーケットを例に、現代社会の流通、販売のあらましについて理解することができる。

④ 学習計画（単元構成表） 全 9 時間 （本時 7 / 9）

学習過程	学習の中心	教師の働きかけと学びのサイクルについて	観点
商業とは (2 時間)	商店について	商業について考えさせる。『探究』 どんな形態、業者があるかを普段の生活から考えさせる。『習得』	【関】
	商業の歴史	商業の歴史について、通貨・流通などに視点をあてて気づかせる。『探究』	【知】
	食品スーパーと コンビニ	スーパーとコンビニの違いについて自分の生活の中から考える。『習得』	【知】
商品配置 (3 時間)	食品スーパーの商品配置について	食品スーパーやコンビニの商品配置について普段の生活から思い起こさせる。『習得』	【知】
	コンビニの商品配置について	商品配置の意味について多面的・多角的に考えさせる。『探究』	【思】
商店の立地 (2 時間)	商店街と食品スーパーの立地	商店はどんなところに集まっているのかを普段の生活から思い起こさせる。『習得』	【知】
	コンビニの立地	コンビニがどんな場所に出店するのか、その理由について考えさせる。『探究』	【思】
大型専門店 (1 時間)	総合スーパーと S C	総合スーパーや S C の特徴について考えさせる。『習得』	【知】
振り返り (1 時間)	学習のまとめ	今までの学習で分かったことや授業の感想を振り返りながら書かせる。『習得』	【関】

⑤ 本時の目標

- 「どこにコンビニを出店するのか（コンビニの立地）」について、消費者・経営者の視点で意欲的に追求し、考察することができる。
- コンビニの出店場所について、追求した結果をまとめたり、発表したりすることができる。
- コンビニの立地条件のあらましについて理解することができる。

⑥ 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援	備 考
課題を確認する。	地図のそれぞれの立地環境について分かりやすく説明をする。	地図 プリント 1
コンビニをどこに出店するのかを 考える。 (個人)	机間巡視し、個々の意見を具体的に持つよう助言する。	
コンビニをどこに出店するのかを 考える。 (グループ)	それぞれの出店場所のプラス面・マイナス面を整理し、 出店の根拠となる理由を明確にさせる。 <ul style="list-style-type: none"> それぞれの出店候補地の立地条件について具体的に検討を加える。 出店の候補地を2ヶ所決定する。その際に、なぜそこを選んだのか。 どのような商品を販売の中心とするのか。 	プリント 2
それぞれのグループの結果を発表し、考えを交流する。	グループリーダー（3年生）に発表させる。	
ゲストティーチャーのコメントを聞く。	コンビニの立地について専門家からのコメントを聞く。 その際、商品配置の工夫等にも触れてもらう。	

⑦ 結果と考察

本実践は「追究し、発信する力を育成する」という教科の主題に沿って、選択教科という、限られた時間にしかも普段交流のない2・3年生が商業（スーパーマーケット・コンビニ）というテーマで学習を展開した。普通、各クラスで行う社会科の授業では課題を設定し、その課題を追究するなかで気づき、自分の考えを持って、それを他者と交流し深め、さらに問い直すという学習を進めてきた。しかし、選択教科では先にも述べたが、課題に対して多様な形で調べたり、まとめたり、さらにそれを交流するという場を取りづらくとも確かである。そこで、授業を構成するに当たって、経済の学習の中でもスーパーマーケットやコンビニといった生徒のごく身近な経済活動、普段から体験し、関心を持って追究できるテーマを設定した。その結果、生徒も関心を持って授業に参加し、異学年のグループでの学習もスムーズに話し合いが進み、活発な意見交換（深め）が展開できた。以下に生徒の授業後の感想を紹介する。

- ・商業についてから始まり、その歴史・スーパーとコンビニの違い・立地など初めて知ることばかりでとてもよい勉強になりました。グループでの学習のとき、いろいろと話合うことがとても楽しくて、特にコンビニをどこに立地するのかの授業が印象に残りました。（3年）
- ・スーパーやコンビニがある場所や商品の配置などかなり深いことを知ることができて楽しかった。（3年）
- ・授業を終わったあとにコンビニに出かけると本当に商品の並び方がその通りだったので楽しくておもしろかった。また、大型スーパーが町のはずれにあることは本当にそうだからおどろいた。（2年）

資料 3

中学生のための世の中入門

1 スーパーとコンビニ (第6回)

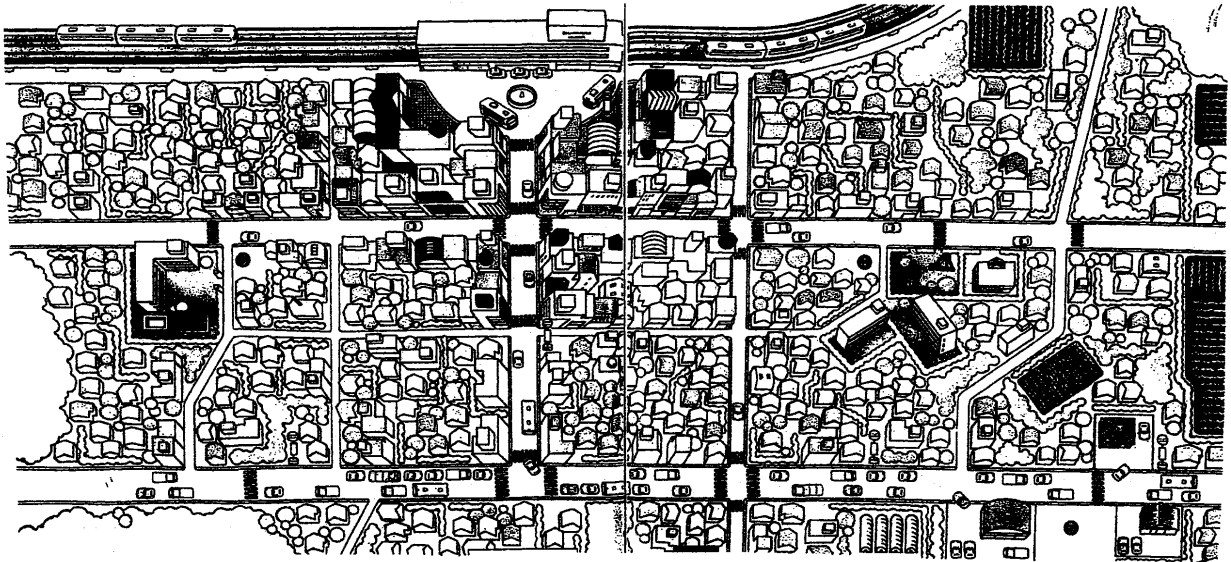
11月17日(金)

コンビニの立地について考えよう。

- ①の場所・・・駅前ビルの1階、駐車場はない。駅前バスターミナルである。
 ②の場所・・・商店街の中心部、買い物、通勤、通学の通路である。駐車場はない。
 ③の場所・・・商店街のはずれ、近くに高校がある。人通りも多く、駐車場もある。
 ④の場所・・・住宅街にある。近くに図書館などの公共施設や学生寮、会社の独身寮がある。駐車場もある。
 ⑤の場所・・・駅や商店街からは遠く離れているが、交通量の多い広い道路に面している。周辺には大型の商店やファミリーレストランがある。

コンビニ ミニ資料

- I 1日の利用者平均数 約870人
 II 1人1回の平均購入価格 約560円



資料 4

中学生のための世の中入門

1. どの場所に店を出店しますか。自分で考えましょう。	2. 班で話し合いましょう。
<p>番号 (④) 選んだ理由 近くに、学生寮 独身寮があり 1人暮らしの人が多いため。ちょっとした買い物をに役立つ。</p>	<p>番号 (④) その立地場所の プラス面 公園の飛地がや、てしる。 寮の学生、社員の人達がやってくる。 マイナス面 駅から遠い。</p>
<p>番号 (③) 選んだ理由 はずれにあるから目立つ 商店街のはずれ付近に住んでいる人達は、そこで買い物ができる。 高校生が下校お際に、寄ってくるから。</p>	<p>番号 (③) その立地場所の プラス面 高校生(下校登校)が買いに来る はずれなので、目立つ マイナス面 時間帯が傾いている。</p>
<p>学習を振り返ってのまとめ ファミリーマートの本部の人の話はとても分かりやすかった。</p>	